

〈研究ノート〉

幼児期の教育から小学校教育への円滑な接続を考える

田 中 幸 代

1. はじめに

2018（平成30）年度から幼稚園教育要領が、2020（令和2）年度から小学校学習指導要領が新たに改訂され完全実施された。今回の要領改訂では、社会に開かれた教育課程、主体的・対話的で深い学び、カリキュラム・マネジメントの確立がポイントとしてあげられていることに加え、資質・能力については幼児教育から高等学校までを通じて見通しを持って育成すること、学びの連続性、学校段階間の接続が重要であるとされている。

遇れば、1990年代の終わりに小1プロブレムが社会的に取り上げられ、大きな問題となった。文部科学省では、2010（平成22）年、幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議を設置し、報告書を出している。その中で、「幼児期の教育（幼稚園、保育所、認定こども園における教育。以下同じ。）と児童期の教育（小学校における教育。以下同じ。）は、それぞれの段階における役割と責任を果たすとともに、子どもの発達や学びの連続性を保障するため、両者の教育が円滑に接続し、教育の連続性・一貫性を確保し、子どもに対して体系的な教育が組織的に行われるようにすることは極めて重要である」¹⁾と述べられている。今回の要領改訂は、その報告を踏まえ、幼小の接続を具体的に要領の中に明記した画期的なものであると言える。

幼稚園教育要領（2017年3月告示）第1章総則では、小学校教育との接続に当たっての留意事項として、「(1) 幼稚園においては、幼稚園教育が、小学校以降の生活や学習の基盤の育成につながることに配慮し、幼児期にふさわしい生活を通して、創造的な思考や主体的な生活態度などの基礎を培うようにするものとする。(2) 幼稚園教育において育まれた資質・能力を踏まえ、小学校教育が円滑に行われるよう、小学校の教師との意見交換や合同の研究の機会などを設け、『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』を共有するなど連携を図り、幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続を図るよう努めるものとする。」²⁾と述べられている。

幼稚園教育の中での育ちが基盤となって小学校教育につながる学びの連続性が大切であり、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を小学校の教師と共有するなどして連携を図っていくことが求められているのである。

また、小学校学習指導要領（2017年3月告示）でも、第1章総則には、学校段階間の接続が明記され、幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を踏まえて教育活動を実施すること

が求められている。すべての教科において接続が目指されることとなり、小学校教育においても「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえた指導が行われることになったのである。

筆者は、長年公立幼稚園で勤務してきた。幼稚園の側からすると、園児が小学校でスムーズにスタートして大きく伸びてほしいと願い、その方策として小学校との連携に熱心に取り組んできた。地域の公立小学校とは公立同士というつながりもあり、小学校との交流活動は地域ごとに頻度や内容の違いはあるものの、どの園でも実施してきた。しかし、交流活動が単発的で行事化していたり、幼児教育の内容についてなかなか小学校側に理解してもらえなかったりするなど、幼小連携についてはもどかしさも感じてきた。

今回の要領改訂の中では具体的な接続のあり方について、幼児期の教育だけでなく小学校教育の中に明記されたことで、交流・連携から接続へと、子どもたちの豊かな学びが小学校教育にしっかりつながっていくことを期待しているところである。

本稿では、2017（平成 29）年度に筆者が勤務していた幼稚園と地域の小学校との 1 年間の幼小交流の実践をもとに、子ども同士の互恵性のある交流活動、教員間の互いの教育の理解などについて報告し、これからの望ましい幼小の接続のあり方について考えていきたい。

2. 幼小連携の経緯

1) 幼稚園と小学校の実態

両校園は、大阪市中央区内の同じ地域に位置する。地域内は昔ながらの家屋もあるが、高層マンションやオフィスビルが立ち並び、幹線道路の交通量は多く、まさに都会の真ん中と言える地域である。

幼稚園も小学校も創立以来長い歴史があり、代々この地に居住している住民と他地域から転居してきた住民が混在している。地域活動が盛んで、子どもたちへの見守りや防災活動・高齢者支援・地域住民の交流イベント実施など、熱心に行われている。地域の方々が幼稚園や小学校に出向いてこられる機会があったり、子どもたちが地域の活動に参加したり、地域の高齢者や未就園の子どもたちと触れ合うことなども積極的に行っている。昔から幼小のPTAのつながりも深い。

園児の進学先は年度によっても異なるが、70～90%の園児が地域の小学校へ進学する。小学校には、近年はいろいろな幼稚園・保育所・保育園等から入学してきている。

2) 交流活動の実際と課題

上記のように、長い歴史の中で地域ぐるみで子どもを育てていこうという土壌の中、幼小の交流活動は 20 年以上前から取り組みが進められており、毎年、内容を見直しながら今日に至っている。

ここ数年園児と小学生の交流は、① 5 年生と園児との交流活動 2 回（実施場所は幼稚園・

小学校の1回ずつ)②入学前の園児の小学校訪問(2年生と交流し、1年生の授業・給食参観)
③作品展(隔年で学習発表会)の参観の年4回の交流活動を計画的に行ってきた。

幼稚園としては、日常的に小学校を身近に感じようようにしたいとの思いはあるが、両校園は徒歩15分以上離れた場所にあり、いつでも園児が遊びに行ったり、小学生が訪ねてきたりするということはできにくかった。

教員同士は、①年度初めに教務主任と幼稚園主任で年間計画の話し合い②各交流活動の事前打ち合わせを担当同士で実施③年度末に進学する園児についての引継ぎ会④幼稚園の前年度5歳児担任が1年生の授業参観を行うなど、両校園の教員同士も機会あるごとに連携を図っていた。しかし、毎年交流活動を行う担任が変わり打ち合わせが形式的になってしまったり、顔を合わせ話す機会が少なかったりするため、互いの教育内容にまで理解が深まらないことは課題であると感じていた。

校長・園長は入学式や運動会など大きな行事に出席し合ったり、学校協議会にそれぞれの委員として参加したり、地域の会で顔を合わせたりするなど、情報交換の機会は多い。それぞれの子どもたちの姿を目にし、教育内容について語り合うこともある。交流活動が園児・児童にとってプラスであること、互いの教育が地域の中で重要な部分を占めていることなど、機会あるたびに話し理解し合っていた。

3) 取り組みの経過

以上のような実態と課題がある中、今回の幼稚園教育要領、小学校学習指導要領の改訂の趣旨を考えたとき、今までの交流活動をもう一度見直し、幼小の連携をより深めていくことが必要なのではないかと考えた。

幼稚園教育要領では小学校との接続に当たっての留意事項として、小学校の教員との意見交換や合同の研究の機会などを設け、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共有するなど連携を図り、幼稚園教育と小学校教育の円滑な接続を図るよう努めるものとしてされている。

そこで、これまでの取り組みをベースにしながらも互いの教育内容の理解を深めるためには、園児と児童の交流活動の内容を再検討することはもとより、両校園の教職員同士がつながり、互いの教育について学ぶ機会をもち、理解を深めていくことが大切であると考え、具体化していくことにした。

4) 連携の目標と年間計画

子どもたちの心の成長と幼小の教育のつながりを図ることを目標に、年間の計画をたてた(図-1)。

①交流活動について

今まで交流をしていなかった3年生と4年生も交流活動を実施することにした。そうすることで、小学校では、今後1年生から5年生まで毎年交流が図られ、継続した取り組みになり(6年生は卒業に向けた取り組みがあるため、行わない)、園児にとっても小学校入学後に

縦割り活動にスムーズに参加ができると考えた。交流活動が園児・児童にとって互いにより意味のあるものになるよう、考えていくことにした。

| 月 | 事業 | 参加 | 内容 |
|-----|--------------|--------------------|--|
| 4月 | 参観 | 昨年度5歳児担任 | 1年生の給食参観 |
| 5月 | 交流 | 5年生と4・5歳児 他学年担任 | 5年生と園児がペアになって、幼稚園で好きな遊びをする <u>他学年小学校教員が参観する</u> |
| 7月 | 交流 | 5年生と4・5歳児 | 前回と同じペアで、小学校のプールで遊ぶ |
| 7月 | <u>合同研修会</u> | 幼小教員 | 「幼児期の教育を通して育てていくこと」のテーマで講演を聞く |
| 9月 | <u>研究会</u> | 幼小教員 | 3年生算数科の校内研究会に <u>幼稚園教員が参加</u> (参観・研究討議) |
| 10月 | <u>交流</u> | 3年生と4・5歳児 | 小学校でグループ活動をする |
| 11月 | 見学 | 4・5歳児 | 小学生の学習発表会を見る |
| 11月 | <u>研究会</u> | 幼小教員 | 2年生算数科の校内研究会に <u>幼稚園教員が参加</u> (参観・研究討議) |
| 12月 | <u>交流</u> | 4年生と5歳児 | パソコンでカレンダー作りを教えてもらう |
| 1月 | <u>交流</u> | 3年生と4・5歳児 | 指導案の内容検討 3年生と園児がペアになり、幼稚園で好きな遊びをする |
| 2月 | 交流 | 2年生と5歳児 1年生と5歳児 | 小学校でグループ活動 園児が1年生の授業参観をし、小学生体験をする |
| 3月 | 評価会 | 幼小管理職と主任 | 年間の連携についての評価反省、次年度に向けて話し合う |
| | 引継ぎ会 | 幼小教員 | 進学する園児についての引継ぎ |

(図-1) 2017(平成29)年度年間計画表 (下線部は今年度初めて実施)

②教員間のつながり

幼小の教員の多くが交流活動に関わることになるので、今まで以上に互いの教育への理解が必要である。幼小合同の研修会の実施や互いの研究会への参加など、教育内容や学びの連続性を理解できるよう取り組みを考えていくことにした。

3. 幼小交流活動の実践

1) 5年生と4・5歳児の交流活動（5月・7月）

例年通り、5年生と4・5歳児が2回の交流活動を実施した。今年度は、5年生の児童数と4・5歳児の園児数がほぼ同じであることを生かして、2回の交流を同じペアで行い、より親しみの気持ちをもてるようにしようと話し合った。事前に情報交換しながら、ペアを決めたり遊びの内容を予想したりし、打ち合わせを丁寧に行った。

5月の幼稚園での遊びでは園児たちが園を案内したり、好きな遊びを一緒にしたり、ふれあい遊びをしたりして、楽しんで活動できた(写真-1. 2)。小学生が園児に、「何して遊ぶのか」「好きな遊びは何?」「私も幼稚園の時、お団子作りしていたよ」など、優しく声をかけてくれた。今年度初めての交流活動であったので、進級して間もない園児にとっては、自分たちの慣れ親しんでいる幼稚園に小学生を迎えることで、緊張感がなく自分の好きな遊びを楽しく小学生と一緒にでき、小学生への親しみや信頼感につながった。

5年生が帰り際、「次は小学校のプールで待ってるよ」「また会おうね」と仲良くなった園児に話しかけてくれた。園児たちはいつまでも「バイバイ」と手を振り、名残惜しい様子で、次の活動への期待が園児の中に芽生えていた。



写真-1 ペアで遊ぶ園児と5年生



写真-2 一緒に泥団子作り

7月、小学校のプールで交流活動を実施した。前回と同じペアでの活動である。顔や名前を覚えているだろうか心配に思っていたが、プールサイドでクラスごとに並ぶと、小学生がよく覚えていてくれ、名前を呼び合いペアの相手を見つけることができていた。大きな小学校のプールに緊張気味だった園児は、ペアのお兄さん・お姉さんと手をつないで、ほっとしたような表情であった。

シャワーのところでは、少し怖そうにしている園児もいたが、後ろから小学生が支えてくれた。「頑張ったね」と褒めてもらい、自信になったようだ。

プールの中では、小学生は園児を抱っこしたりおんぶしたりして、怖がらないように、楽しめるように、優しく関わってくれていた。園児も、安心しきって小学生に身体も心も委ねていた(写真-3. 4)。

活動内容は、おんぶや抱っこでの水慣れ、じゃんけん遊び、長くつながっての電車ごっこなど、園児が遊びの中で水に親しめるように幼小担任で話し合いをして進めた。



写真- 3. 4 プールで交流活動をする5年生と園児

小学校でのプール遊びはとにかく楽しかったようで、「また行きたい」「おっきいプールで遊びたい」と話していた。この遊びが自信になったのか、翌日からの幼稚園でのプール遊びでは、明らかに動きが積極的になり、意欲的に取り組む園児が増えた。小学生の温かい関わりが、園児の前向きな姿を支えてくれていると実感した。

5年生の担任は、2回の交流を通して、「この子たちが、こんな優しい表情するなんて」「いつもと違った面を見ることができた」と話していた。5年生の活動のねらいである「園児の気持ちに寄り添って、思いやりの気持ちを育み、自己肯定感を高める」という心の成長を、園児との温かい関わりの中に見ることができ、交流の成果を感じた。

2) 4年生と5歳児の交流活動(12月)

4年生との交流は今年度、初めてである。活動内容を相談したとき、園児も興味があるであろうパソコンを使っている活動はどうかと小学校側から提案があった。園児の質問に答えたり、園児が理解できるように教えたり、園児の気持ちに寄り添ったりして、思いを伝え合うことを目標にしたいとのことであった。幼稚園としても、園ではできない活動で、小学生や小学校生活への憧れの気持ちにつながるのではないかと考えた。

12月、小学校のパソコン教室で、来年の自分の生まれた月のカレンダー作りを行った。小学生は園児にどう伝えたらわかってもらえるか「園児役と小学生役に分かれて練習しよう」と児童から声が上がったとのことで、事前に練習をして園児を迎えてくれた。「何月生まれ?」「じゃ、ここを押してみてもいい?」「わかる?」「どの絵がいい?」と、丁寧に園児に聞いてくれていた。園児も最初はちょっと不安そうであったが、だんだん興味がでてきて、「これでいいの?」「どうするの?」と分からないことを質問するようになっていった。自分の生まれ月を打ち込んだり、好きな絵柄を選んだり、小学生に一つ一つ教えてもらいながら、完成した(写真-5.6)。

1枚出来上がると、もっと作りたいと、2枚、3枚と作り出す園児もいた。

出来上がったカレンダーは大切に幼稚園に持ち帰り、降園時に保護者に見せ「これ、僕が

作ってん、パソコンで」と自慢げに話していた。



写真-5. 6 パソコンでカレンダー作りをする4年生と5歳児

3) 3年生と4・5歳児の交流活動(10月、1月)

10月、小学校の体育館で3年生がいろいろな遊びの場を考えて準備をし、招待してくれた。3年生との交流は初めてであったが、昨年2年生の時に交流活動を経験しているので、交流活動のイメージがはっきりしていたようで、児童たちから園児とこんな遊びをしたいと意見が出て主体的に取り組みができたようであった。手作りのすごろくゲームや、なわとび、けん玉などを楽しんだ(写真7. 8)。

園児も交流活動を積み重ねる中で、小学生と関わることは楽しいことであると実感し、活動の見通しがもてるようになってきていた。小学校から招待状が届いたとき、園児から「プレゼントを持っていこう」と声上がり、ペンダントのプレゼントを作って、お礼に渡した(写真9)。



写真-7. 8 縄やすごろくで遊ぶ3年生と園児



写真-9 お礼のペンダントを渡す

1月には、今度は幼稚園に3年生を招待し、交流活動を行った。

事前の打ち合わせの中で、指導案の形式についても検討した。それまでは、幼小それぞれで指導案を作って事前に交換していたが、今回は1枚の指導案に幼小それぞれの活動のねらい、指導援助及び配慮、育てたい力などを記入した。活動のねらいは、幼稚園「3年生と関わりながら好きな遊びを楽しみ、憧れや親しみの気持ちをもつ」、小学校「園児と関わりながら、人とのふれあいの大切さを感じたり、思いやりの気持ちをもって活動したりする」とした(図

－2)。指導案を合同で作成することは、互いの教育内容の理解につながり、子どもたちの指導に役立つのではないかと考えた。

| | | | |
|--|--|---|--|
| <主な活動> ペアの友達と好きな遊びをする (4・5歳児) 3年生と関わりながら好きな遊びを楽しみ、憧れや親しみの気持ちをもつ | | ねらい | (3年生) 園児と関わりながら、人とのふれあいの大切さを感じたり、思いやりの気持ちをもって活動したりする |
| 指導者の願い・育てたいこと ・小学生への親しみの気持ち ・自分の思いを言葉で伝えたり、相手の話を聞いたりする。 ・自分なりの目的や見通しをもって活動する。 | 幼稚園指導者の援助・配慮 ○お互いに気持ちよく挨拶ができるよう投げかける。 ○なわとびの表現活動を見て感じたことを受け止め、憧れの気持ちに共感する。 ○ペアの友達の名前を知り話ができるように投げかけ、緊張している子どもには側で指導者が見守ったり会話に加わったりする。 | 予想される活動 ○遊戯室に集まる ○3年生からの挨拶 なわとびによる表現活動 ○ペアに分かれて座る ・ペアの友達と自己紹介する ○話を聞く 今日遊びについて ○したい遊びをペアで相談する ○好きな遊びをする | 小学校指導者の援助・配慮 ○お互いに気持ちよく挨拶ができるよう、投げかける。 ○練習してきた言葉がけや身体表現を、招いていただいた感謝の気持ちも込めながら行うことができるよう意識づけしておく。 ○本日のペアの名前を覚えたり、園児に自分の名前を知らせたりできているか確認する。 ○児童が遊びの内容を理解して、園児に話しかけているかの確認をし、できていない場合は助言する。 |
| | | | 育てたい力 <総合的な学習の時間> ・思い切り身体を動かして表現することができる。 ・相手の気持ちをくみ取りながら温かい心で関わる事ができているか。 |

(図－2) 幼小合同で作成した指導案

事前保育として、園児は3年生に招待状を書いた。どのような遊びの場所があるか、一緒にしてほしいことなどを教員が聞き取り手紙にしたことで、3年生と再会できることをとても楽しみに心待ちにしていた。招待状を受け取った3年生は、園児に自分たちが頑張っていることをぜひ見てほしいと意見が出て、なわとびの表現運動を見せてくれることになった。

当日、3年生がリズムカルな音楽に合わせて、いろいろななわとびを見せてくれた。「すごい!」「おー!」と園児から声が上がリ、自然に拍手が起り、憧れの気持ちを抱いている様子であった(写真－10)。

その後の好きな遊びでは、早速なわとびに挑戦し3年生に教えてもらっている園児もいて、大きな刺激になった。3年生は園児に優しく関わってくると同時に、自分たちもしっかり遊びたい様子で、いろいろな遊びの場所で盛り上がり遊びを楽しんでいた(写真－11、12)。



写真－10 なわとびの表現活動



写真－11、12 かるたやじゃんけん遊ぶ3年生と園児



カード遊びを選んだ4人は、園児同士、小学生同士がじゃんけんをして、園児の勝った子が1番、負けた子が2番、小学生の勝った子が3番…と順番を決め、小学生が園児を優しくリードしていた。長なわとびをしていた4人は、園児が引かかると「じゃあこうしようか」となわを回していたのをヘビの動きに変え、園児に合わせて考えていた。こままわしの遊びでは、園児が何度も回せたのに、3年生がなかなか回せず、園児に教えてもらっているペアも

あった。「〇〇くん、すごいな、上手やな」と褒めてもらい、園児の自信になっていた。

最後にベアの子ども同士で経験や思いをしっかりと言葉で伝え合う、遊びの振り返りを行った。3年生が「どうだった?」「僕は積み木を高く積めて面白かったわ、〇〇ちゃんは?」と分かりやすい言葉で園児に話しかけてくれたので、「うん、私よりずーっと高かった」など、園児も言葉で伝えることができていた。

4) 交流活動の成果と課題

幼小互いに育てたいこと、ねらいを明確にして取り組んだことで、互惠性のある交流活動を行うことができたことは大きな成果であった。

園児にとっては、積み重ねた豊かな関わりの中で、小学生に親しみや信頼の気持ちを持ち、小学校が行ってみたい楽しい場所になり、進学することが楽しみになった。小学校が身近な場所になり、進学することに不安な気持ちを抱いている子どもにとっては、高いと感じていた小学校のハードルが少し下がったのではないだろうか。また、小学生に「すごいなあ」「カッコいい」と憧れの気持ちをもったことで、あのような小学生になりたいと理想を持ち、自身の将来像を描くことができたのではないかと考える。

小学生は1～5年生が交流活動を行ったが、1・2年生の時に交流経験のあった3年生が主体的に見通しをもって活動できたことから、小学生にとっても毎年交流経験を積み重ねることには大きな意味があり、今年度の経験を基盤として来年度以降交流がより深まるであろうと考えられる。

また、交流活動で顔見知りになった小学生と園児は、日常的に地域の中で挨拶を交わしたり、地域の様々な活動の中で交流を続けたりしていくこともあるであろう。このことは地域活動の活性化につながるのではないかと期待する。

関わった教員が実際の子どもの姿を通して、互いの教育内容を理解し、幼小のつながりを実感できたことも大きな成果であったと考える。

課題としては、計画を推進する担当者が今後も幼小連携に継続的に関わることができるかということがあげられる。今年度の幼小連携活動の中心であった小学校教務主任と幼稚園主任は、前任校園でも幼小連携の中心となって活動しており、幼小連携の必要性を十分理解して活動推進を図っていた。しかし、次年度以降も両教員が担当できるとは限らず、教職員全体に連携活動の理解を深め、推進できる人材を育成していくことが望まれる。また、両校園共に教育課程の中に連携活動を位置づけ、内容の充実を図っていかなければならない。

4. 教職員の交流

1) 交流活動、相互参観、研修を通して、子どもの姿や育ち、学びを共有する

5月の幼稚園における交流活動に、該当の5年生担任だけでなく他学年の教員が数名参観をした。幼稚園の参観は初めてという教員もいたので、ただ遊んでいるだけではないこと、遊

びの中に学びの芽生えがあり教員は環境構成をしたり援助をしたりしていることなどを説明した。参観した教員は、園児が幼稚園の中を進んで案内したり、この遊びがしたいと小学生に思いを伝えたり、遊び方を小学生に説明したりするなど、自分の思いをきちんと表現し主体的に行動していることに驚き、「思っていたより、すごくしっかりしている」と話していた。園児の生活の場である幼稚園での姿を見てもらったからこそ、具体的に園児の育ちや幼児教育について理解してもらえたのであろう。

7月には合同研修会として「幼児期の教育を通して育んでいくこと」のテーマで講演を聞いた。幼児期の終わりまでに育ってほしい姿や遊びの中で生まれていることなどについて、小学校の教員には幼児教育への理解を深めてもらい、幼稚園の教員は自分たちの保育の振り返りに役立った。

9月、11月には幼稚園の教員が小学校の校内研究会に参加した。研究授業後の反省会、討議会に参加したのは初めてであった。小学校の授業は教えるもので幼稚園の保育とは異なるものと思っていたが、小学校も幼稚園もプロセスを大切にしていること、先を見通しどんな大人に育てたいか目指しているものは同じであることを実感でき、小学校教育への理解が深まった。また、小学校教育の中に幼稚園で大切に育んでいる意欲や心情などが生かされていることに気づき、自分たちの行ってきた保育がこれでいいと思えたことなど、校内研究会からたくさん学びがあった。

小学校の担任と幼稚園の担任とが交流活動を行うに際して、指導案を書いたり打ち合わせを行ったりしたことは、子どもの学びや育ちを共有する大切な機会であった。特に、1月の交流時に指導案の形式を検討し、1枚の指導案に幼小それぞれのねらい、配慮、育てたいことを記入したことは、互いの意図やねらいをはっきり目に見える形で表すことができ、意味があった。交流活動の際にも、互いの思いがよくわかり、児童・園児への言葉かけや指導に役立った。

2) 教職員の交流の成果と課題

園児・児童の交流だけでなく、教員間の交流の成果としては、幼児期の教育への理解が小学校の教員の中に広がったことがあげられる。遊びの中に学びがあり、その背景に教員が意図的に環境整備・教材準備を行い指導援助を行っていることが理解してもらえた。幼児期の教育の続きに小学校教育があること、小学校は0からのスタートではないことが実感してもらえたのではないだろうか。

また、幼稚園の教員の小学校教育への理解も深まった。幼児期の教育がどのように小学校教育につながり生かされているかを学び、改めて保育の充実に取り組んでいきたいという思いにつながった。

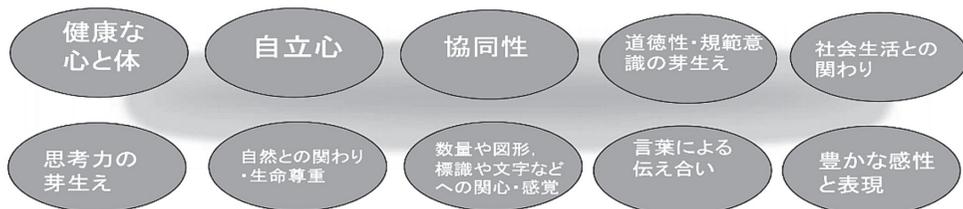
一部の教員の連携に終わらず、小学校・幼稚園全体の取り組みができ、交流活動、研修、参観などを通して、子どもの姿や育ち、学びを共有することができたことは大きな成果であった。

課題としては、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を具体的な園児の姿の中から共有して、小学校教育に教育内容をつなげていくことがあげられる。小学校教育の中で「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえて、幼児期の学びを生かした指導を行い、学びをつなげていくことが大切である。そのためには、入園から育んできた資質能力を小学校の教員に分かりやすく伝えていく工夫が必要だと感じた。

5. 終わりに

園児と児童と一緒に過ごす時間や場を設定し、直接触れ合う機会をもつことは、小学校への円滑な接続に有効であるとともに、園児・児童の学びを広げたり深めたり、心を豊かに育むことにつながるということが1年間の取り組みから実証できた。幼児期の教育と小学校教育の接続のねらいと意義がそこにある。そして、それを支えるのは、教員の互いの教育への理解である。教育方法だけでなく様々な違いが幼小の間には存在するが、同じ地域に育つ子どもたちがこんな大人に育ってほしいという、同じ目標に向かってることを共有できたことは、今後の幼小連携や園児・児童にとって大きな成果であり、幼小が円滑に接続を図っていくための根本であると考えている。

今後の課題としては、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」(図-3)を実際の子どもの姿をもとに幼小の共通言語として共有し、接続期のカリキュラムを幼小で検討する機会を設定することが望まれる。9年間を見通した教育課程の編成へと取り組みが発展していくことを願っている。そして、地域の他の幼児教育施設にもこの取り組みが広がり、地域の子どもの豊かな育ちにつながることを期待している。



(図-3) 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」³⁾

最後に、現在筆者は幼稚園免許・小学校免許を取得する学生に、幼小交流活動の実際や幼小接続の意義について講義している。しかし実際のところ、自身が幼小または保幼小交流を経験した学生は少なく、交流活動のイメージがわきにくいようである。また、自分たちもこんな体験があったらよかった等の感想も聞かれる。

今後、保幼小接続を推進・充実させていくためには、現職教員だけでなく、幼稚園教諭・

保育士や小学校教諭の養成課程において、子どもの発達に関する理解とともに、小学生と幼児の交流活動の進め方や教員同士の連携の持ち方、教育行政での取り組みといった教員の果たす役割について理解を深めることが大切である。接続の諸課題や円滑な接続の在り方について、学生に早い段階から具体的に学ぶ機会を与え、その必要性を十分理解して、教育現場に出ることが重要であると考ええる。

引用文献 1) 『幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）』

2010（平成 22）年 11 月 文部科学省 p 2

2) 『幼稚園教育要領』

2018（平成 30）年 2 月 文部科学省 p 7

3) 『幼児教育部会における審議の取りまとめについて（報告）』

2016（平成 28）年 8 月 幼児教育部会 文部科学省 資料 2

参考文献 1) 『小学校学習指導要領』2020（令和 2）年 4 月 文部科学省